

「日本の諸地域」における 動態地誌的な学習による授業の研究

— 「確かな学力」を育む授業の工夫 —

清田直紀¹

平成24年度より完全実施された中学校学習指導要領では「動態地誌的な学習による国土認識の充実」が示された。そこで本研究では「動態地誌的な学習」の明確な解釈を試み、その解釈に基づく単元・授業を提示した。追究の過程や結果を表現する授業に「観光」の視点を取り入れ、「観光プランづくりをとおして地域的特色をとらえさせる学習」を開発・実施した。そして、開発した単元・授業が「確かな学力」を育むものであるかを検証した。

はじめに

「動態地誌的な学習」とは何か。この言葉を初めて目にした時、私はその言葉の意味する学習の具体的な姿を思い描けなかった。「動態地誌的な学習」とはどのような学習で、単元・授業はどのような形になるのか。この問題意識が本研究の根本的な動機になっている。

「動態地誌的な学習」とは平成24年度より完全実施された中学校学習指導要領（以下、「指導要領」）で設定された「日本の諸地域」を学習するスタイルを指す。平成20年1月に出された中央教育審議会答申（以下「答申」）では思考力・判断力・表現力等の育成の重要性が言及されており、これに対応する形で「動態地誌的な学習」が導入されたととらえられる。

しかし、「指導要領」には「動態地誌的な学習」という言葉は記載されていない。「内容の取扱い」には「地域の特色ある事象や事柄を中核として、それを他の事象と有機的に関連付けて、地域的特色を追究する」という説明はあるが、先行研究の検討をとおして解釈の仕方が複数存在していることが分かった。

そこで、本研究では「動態地誌的な学習」の明確な解釈を試み、それに基づく具体的な単元・授業を「関東地方」を例に設計した。また、本研究の単元・授業が「確かな学力」を育むものになるよう単元第6・7時（学習展開「3次」）に「観光」の視点を取り入れた学習を開発するなどの工夫を施した。そして、授業の実践と生徒の変容の分析をとおして、開発した学習や施した工夫の有効性について検証した。

研究の内容

1 「動態地誌的な学習」の明確な解釈

(1) 先行研究の定義

1 横須賀市立衣笠中学校

研究分野（授業改善推進研究 社会）

ここでは先行研究者2名を取り上げ、「動態地誌的な学習」のとらえ方を確認する。まず、山口（2011）は「動態地誌的な方法とは『ある内容・題材に重点を置いて教材構成をする地誌学習の方法』」としている。

これに対し、塩満（2010）は「地理的事象間のネットワークを組み立てることで、地域を『地理的事象が相互に作用しあい、全体として特性を有する集合体』としてとらえることをめざす学習」（p.115）と定義し、「『因果の連鎖』による地域性把握」（p.182）という、授業で取り扱われる学習内容が次々につながって地域的特色をとらえていく過程を重視している。山口の解釈は幅が広く、塩満はより限定的にとらえている。

(2) 静態地誌的な学習・総合的な学習の時間との比較 ア 動態地誌的な学習と静態地誌的な学習の比較

「動態地誌的な学習」と対比されるものに静態地誌的な学習がある。朝倉（2008）は静態地誌的な学習について「『この地域はどんな特色をもっているのか』という問いを立て、自然の特色、農業の特色、工業の特色、というように、取り上げた地域の特色を項目ごとに（中略）明らかにする方法」としている。中学校学習指導要領解説社会編（以下、「解説」）には、項目ごとの地誌的知識の習得に偏重した学習に陥らないようにするという記述があり、「動態地誌的な学習」が求められていることが分かる。

イ 動態地誌的な学習と総合的な学習の時間の比較

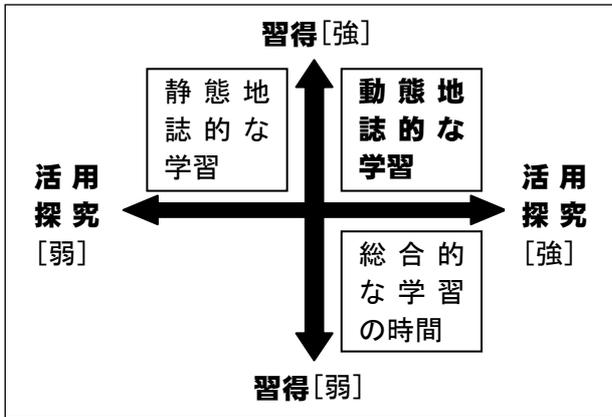
「動態地誌的な学習」の学習展開と総合的な学習の時間（以下「総合学習」）の「課題の設定→追究→まとめ」という学習展開は一見すると類似している。しかし両者には違いが二つある。

一つ目は、社会科には「習得すべき知識・技能」があり、「総合学習」にはそれがないということである。「答申」では「基礎的・基本的な知識・技能の定着やこれらを活用する学習活動は、教科で行うこと」（p.130）としている。二つ目は「課題設定の違い」である。「総合学習」では生徒の興味や学校・学級単位で課題を設定するが、「動態地誌的な学習」では「指導要領」

に七つの「考察の仕方」が設定されており、それらを各地方に当てはめながら全ての考察の仕方での学習させるよう求められている。

ウ 各学習の位置付け

ここまで述べてきた「動態地誌的な学習」と静態地誌的な学習や「総合学習」との違いを第1図で示した。縦軸は知識・技能の「習得」の強弱、横軸は「活用・探究」の強弱を表している。



第1図 各学習の位置付け

(3) 「動態地誌的な学習」の「授業設計の視点」

本研究では「動態地誌的な学習」について「指導要領」「解説」「答申」を整理し、五つの「授業設計の視点」（以下、「視点」）を設定した（第1表）。本研究では、この五つの視点に基づいた単元・授業を「動態地誌的な学習」として解釈しとらえる。

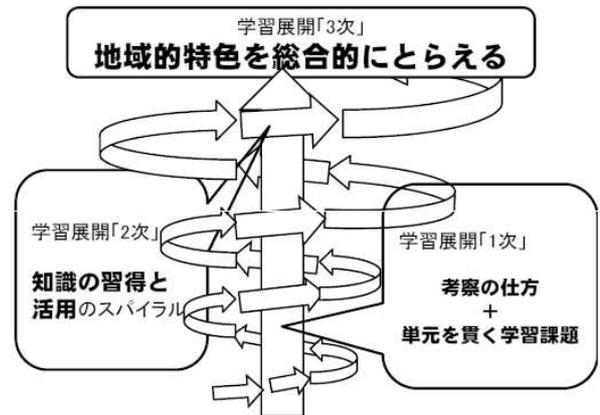
第1表 「動態地誌的な学習」の「授業設計の視点」

- 1 地域の特色ある事象を中核とする（中核的事象）
- 2 中核的事象と他の事象を関連付けて地域の特色をとらえる
- 3 単元は3段階の学習展開で構成する
 - 1次 地域の特色を示す地理的事象を見いだす段階
 - 2次 中核とした地理的事象を他の事象と関連付けて追究する段階
 - 3次 追究の過程や結果を表現する段階
- 4 「単元を貫く学習課題」が設定されている
- 5 「習得・活用・探究」型の学習スタイルである

視点1・2は「指導要領」の「地域の特色ある事象や事柄を中核として、それを他の事象と有機的に関連付けて、地域の特色を追究する」という記述を基に設定した。視点3は「解説」の「動態地誌的な学習」の学習展開例を基に設定した。さらに「解説」では学習展開の「1次」で「地域の特色を追究するための適切な課題を設定」することを求めている。本研究ではこれを「単元を貫く学習課題」ととらえ視点4とした。視点5は「答申」の「改善の基本方針」にある「社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得させ、それらを活用する力や探求する力を育成する」（p.79）という記述を基に設定した。

五つの視点から「動態地誌的な学習」を概念図（第2図）で示した。図は、視点3～5の各要素を組み合わせ作成した。知識の習得と活用のスパイラルを徐々

に大きくしながら、「単元を貫く学習課題」の解決をとらえて地域の特色に迫るイメージでとらえ、「らせん階段型」の概念図とした。



第2図 動態地誌的な学習の概念図「らせん階段型」

2 明確な解釈に基づく単元・授業の設計

(1) 先行研究の単元・授業モデルの課題

単元・授業を設計するにあたっては、1での明確な解釈に基づくとともに先行研究における単元・授業モデルの課題（以下、「課題」）を明らかにして、その克服を試みた。先行研究の単元・授業モデルの分析から「課題」は次のようになる。

「単元を貫く学習課題」の解決で単元の学習が終了し、地域の特色をとらえる単元構成になっていない。

この「課題」は複数の先行研究に見られた。具体的には「単元を貫く学習課題が設定されていても、その解決で単元の学習が終了してしまっている」「単元を貫く学習課題が地域の特色をとらえる規模になっていない」などである。まとめると「課題」の核心は次のように言えると考えた。

学習展開「3次」（追究の過程や結果を表現する段階）の学習が「単元を貫く学習課題」の解決・まとめに止まっており、「動態地誌的な学習」の目標である「地域の特色をとらえる」に達していない。そして、達していないことへの課題意識や言及が見られない。

これは視点2の「地域の特色をとらえる」という点について不十分であることを示す。塩満(2010)は「単元を貫く学習課題」について、「諸事象を関連付けて考察するための中核となる問いであり、地域性を記述するための手がかりを得るための問いなのである」（p.185）と指摘している。つまり「単元を貫く学習課題」の解決がそのまま「地域の特色をとらえる」ことではないということである。

(2) 「観光」の視点を取り入れた学習の開発

本研究では(1)で示した「課題」を克服すべく『観光』の視点を取り入れた学習を開発した。以下、開発した学習に施した工夫を「授業の工夫」とよぶ（第

2表)。授業の工夫は学習展開「2次」までの学習内容を「3次」で「地域的特色をとらえる」ものに再構成するための「装置の役割」を担っている。

第2表 授業の工夫

- 1 「外国人」の視点を活用した学習・発問などの工夫
- 2 観光プランづくりをとおして地域的特色をとらえる学習
(以下、「観光プラン学習」)
- 3 教師の積極的関与

「観光」の視点を取り入れた理由は生徒の学習意欲を向上させるためである。「観光」とは主として楽しむことを目的に旅行などに出掛けることである。多くの生徒たちは小学校時代の修学旅行や遠足、家族旅行などで楽しい経験をしていると予想し、「観光」の楽しいイメージを授業に取り入れようと試みた。塩満(2010)は自身の研究の中で「人の姿や身近なものから地域性をとらえる手立てが欠けている」(p.211)と述べている。この指摘から、本研究では生徒にとって身近で経験の蓄積もある「観光」の視点を授業に取り入れた。

ア 「外国人」の視点を活用した学習・発問などの工夫

(7) 「外国人観光客」の視点を活用した学習

「外国人観光客は都市観光を楽しむ傾向がある」という調査結果から「流行・情報の発信地としての都市」が多いという関東地方の新たな一面をとらえさせることができると考えた。日本政府観光局の調査(2011)によると外国人観光客の約6割が関東地方を訪れる。さらに、訪れる場所の上位30カ所のうち21カ所が関東地方、そのうちの17カ所が東京に集中している。これらから「流行・情報の発信地としての都市」が多いという一面をとらえさせる学習を実施した。この学習では、生徒にも身近な「流行」や「最先端のファッション」、「ショッピング」という面が強調されることから学習意欲を高めることにもつながる。

さらに、「外国人観光客」の視点を活用した学習には学習展開「2次」と「3次」を自然な流れで結び付ける役割がある。つまり、「外国人観光客」の視点を活用することで学習展開「3次」の「観光プラン学習」につなげる役割も担っているということである。

(4) 「外国人の友達」の視点を活用した発問等の工夫

「観光プラン学習」の発問・指示に「海外に住んでいる『外国人』の友達」という条件を設定した(第3表)。この条件を設定することで「観光プラン」は自分が楽しむためではなく、地域的特色を客観的にとらえることが目的であると生徒に認識させられると考えた。

イ 「観光プラン学習」

(7) 「観光プラン学習」とは

本研究で開発した「観光プラン学習」とは「観光プランづくり」と「地域的特色を説明文にまとめる」学習の二つで構成する。「観光プランづくり」でその地域のもつ機能や性格について認識を深め、それらを活用して「地域的特色を説明文にまとめる」という学習で

ある。発問・指示は第3表のとおりである。

第3表 「観光プラン学習」の発問・指示

【観光プランづくり】

海外に住んでいる外国人の友達が関東地方に観光旅行に来ます。関東地方全体の特色がバランスよくわかるようなプランにしたいと思っています。あなただったら、どこをすすめますか。3つ(単元第6時)[5つ(単元第7時)]書いてください。また、その場所をすすめる理由も書いて下さい。

【地域的特色を説明文にまとめる】

海外に住んでいる外国人の友達に「関東地方とはどんな地域ですか?」と聞かれたとしたら、あなたはどのように説明しますか。関東地方の特色を意識して書いて下さい。

「観光プランづくり」では「観光地」を「その地方のもつ機能や性格を表す場所」ととらえさせる。例えば国会議事堂＝「首都機能」、日光＝「歴史・文化」などである。このとらえ方に基づいて「観光プラン」をつくることで地域的特色に対する認識を深めさせる。

(4) 「観光プラン学習」を開発した理由

「観光プラン学習」を開発した理由は、「観光プラン学習」が「視点」に沿い、「課題」を克服する優れた点をもつからである。具体的には次の三点がある。

- 1 学習展開「2次」までの学習内容を「3次」で「地域的特色をとらえる」ものに再構成する
- 2 「思考力・判断力・表現力」を高められるとともに視点5に沿った「習得・活用・探究型」の学習スタイルである
- 3 学習意欲を高める学習である

1について、「観光プラン学習」は「単元を貫く学習課題」に基づいて考えてきたことを「地域的特色をとらえる」ものに再構成するために開発した。前述したように、この授業の工夫は学習展開「2次」までの学習内容を「3次」で「地域的特色をとらえる」ものに再構成する「装置」としての機能をもっている。

2について、「観光プラン学習」には思考・判断・表現する場面が多くある。次に具体例を挙げる。

- ・観光地がどのような機能・性格を表すか考える
- ・関東地方の特色が伝わるプランとなるように、観光地を評価しどれを選択するのか判断する
- ・選択した理由をワークシート(第3図)に記述する
- ・お互いのプランについて説明しあう 等

この「観光プランづくり」は2回実施する。「観光プランづくり①」では選択する観光地を三つ、「観光プランづくり②」では五つ(第3図)にした。生徒は1回目から2回目のプランづくりの間に全体での発表などを経て、地域的特色への理解がより深まった状態になっている。その状態で、選択できる観光地が二つ増加という設定で再びプランづくりを行えば、地域的特色についてさらに考えを深めることができる。このような学習の流れは、単元をとおして「習得」してきた知識などを「活用」させる学習と言える。また観光プランは「外国人の友達へ提案」、地域的特色の説明文は「外国人の友達に説明」するためという設定で作成する。これらは「探究」すべき過程ととらえられる。

おすすめの場所	その場所をすすめる理由
霞が関	国会議事堂や皇居など日本の重要な機関が集中する。また、国の最大の航空ターミナルである。日本最大の橋、輸入税関を誇る皇居などから
羽田・成田空港 京浜工業地帯 工業団地(地帯)	色んなものを集めて見られる。
日光	歴史的な建物が見られる。貴重な自然系が見られる。
伊豆諸島	年間を通して温暖な気候で、美しい自然、世界自然遺産。

第3図 生徒のワークシート記入例

3について、「観光プラン」には唯一の「正解」があるわけではないので、生徒の多様な考えが認められる。よって、生徒は「間違えたらどうしよう」という重圧を感じることなく学習に取り組むことができる。このことは生徒の学習意欲を高めると考えた。

ウ 教師の積極的関与

「教師の積極的関与」(第4表・第4図)とは課題である視点3の学習展開「2次」から「3次」への転換を図るための工夫である。

第4表 「教師の積極的関与」の流れ

1	黒板右側に貼られた各グループの観光プランについて「書き添う」コメントをする。「スカイツリー、ディズニーランドが多く、関東地方の楽しい一面しか伝わらないのでは？」等
2	「観光地はその地方の機能や性格を表す」という考えを再確認する。
3	単元第1～5時の学習内容について振り返らせる。 ①教科書にある太字用語(重要語句)に通し番号をふらせる。 ②太字用語は15個あり、関東地方の機能や性格を表していることを説明。15個の太字用語を書いた模造紙を黒板の左側に貼る。(第4図参照) ※教科書の太字は次のとおりである 1 首都 2 都心 3 東京国際(羽田)空港 4 副都心 5 再開発 6 ニュータウン 7 東京大都市圏 8 過密 9 京浜工業地帯 10 京葉工業地域 11 工業団地 12 北関東工業地域 13 横浜港 14 成田国際空港 15 外国人労働者 ③15個のうち、関東地方にしかないものに○を付けさせ「地方的特殊性」に焦点をあてる。 ④自分やグループの観光プランが太字用語の表している機能や性格が伝わるプランになっているか振り返らせる。
4	太字用語以外にも関東地方の機能や性格を表している観光地があることを確認する。 ※歴史(日光・鎌倉)、自然(小笠原諸島)、文化(温泉)など
5	「他地域との結び付き」を中核とした考察の仕方に沿った知識の整理を促すために教科書のグラフを参照・読み取らせる。
6	5を受け、「都市観光」「流行・情報の発信地」「首都機能」「政治・経済・文化の中心」について特に強調。この四つについて記入した紙を黒板の中央に貼って示す。(第4図参照)

塩満(2010)は自身の授業実践を振り返り、学習展開「3次」について「最終的なまとめを行わせる際は、各単位時間で取り扱った中心的な事象や地名を掲げ、これらを結び付けて記述することを指示したり、ワードを結んだ構造図を作成させたりするなどの工夫を行うことも必要」(p.185)と指摘した。この指摘から、本研究では、単元第1～5時で学習した「教科書の太字用語(重要語句)」を振り返らせる指導や、設定した考察の仕方である「他地域との結び付き」に沿った知

識の整理などを「教師の積極的関与」の中に設定した。



第4図 授業の工夫3「教師の積極的関与」

前述した「観光プラン学習」は学習展開「2次」までの学習内容を「3次」で「地域的特色をとらえる」ものに再構成する「装置」である。そして「教師の積極的関与」は、その「装置のスタートボタン」とも言える役割を担っている。

(3) 本研究で設計した単元・授業

(1)で指摘した課題と、その課題を克服するために(2)で述べた授業の工夫を組み込んで単元計画(第5表)を設計した。

第5表 本研究の単元計画

(関東地方 他地域との結び付きを中核とした考察)

次	時	指導計画(学習内容等)
1次 地域の特色を示す地理的事象を見いだす段階	1	日本における関東地方～地形や気候、構成する都県を学ぶ～ ①関東地方について概観する ②単元の「考察の仕方」を確認する ③「単元を貫く学習課題」を設定する 「東京を中心とする関東地方はなぜ他の地域との結び付きが強いのだろうか?また、どのように結び付いているのだろうか?」
	2	日本の首都、関東地方の中心地・東京～政治・経済・文化の中心～ 【関連付ける事象】首都、都心、東京国際空港 等
	3	関東地方内部における東京と周辺地域のつながり①～都市圏と交通網～ 【関連付ける事象】東京大都市圏、過密 等
	4	関東地方内部における東京と周辺地域のつながり②～産業の特色と変容～ 【関連付ける事象】京浜工業地帯、京葉工業地域 等
	5	関東地方と世界のつながり～政治・経済を中心に～ 【関連付ける事象】横浜港、成田国際空港 等
3次 追究の過程や結果を表現する段階	6	観光プランづくりをとおして地域的特色をとらえる 1 旅行体験などから「観光」へ意識を向ける 2 関東地方の観光地をとらえる 3 「なぜ外国人観光客は都市観光を楽しむのか」について考え、「流行・情報の発信地としての都市」という新たな関東地方の一面をとらえる 【授業の工夫1】 4 観光プランづくり①【授業の工夫2】 ・個人で作成→4人グループで発表→グループで作成
	7	5 各グループのプラン発表 ・発表内容を共有化する ・発表を聴いての感想 6 教師の積極的関与【授業の工夫3】 7 観光プランづくり②【授業の工夫2】 8 地域的特色を説明文にまとめる【授業の工夫2】

3 授業の実践と生徒の変容

本研究では学習展開「3次」にあたる単元第6・7時の授業を実践した（平成24年10月18・19日の2日間、横須賀市立衣笠中学校2学年2クラス（78名）を対象に検証授業を実施）。授業の実践を経て生徒がどのように変容したかを見取り分析することで授業の工夫の有効性について検証した。生徒の変容を見取る視点は学校教育法にある「学力の3要素」（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学習意欲」）とした。

なお、本研究において実施した授業では教師の積極的関与の度合いに次のような差をつけた。差をつけることで生徒のワークシートの記述内容に変化があるかどうかを確認し、授業の工夫の有効性について分析しようと試みた（つけた差は、当然のことながら生徒に著しい学力差が生じない程度に留める配慮を行っている。つけた差とは両クラス共通で学習した内容についての「振り返り」の差であり、A組で学習したことをB組で学習させなかったということではない）。

A組：教師の積極的関与（第4表）の1～6を実施

B組：教師の積極的関与（第4表）の1～4を実施

(1) 「思考力・判断力・表現力」の変容

ア 変容の見取り方

「思考力・判断力・表現力」の変容は本研究の授業前に実施したアンケート（以下、「事前アンケート」とワークシートの「関東地方の特色に関する説明文」を比較・分析して見取る。記述を見取るポイントは、本研究の単元で設定した考察の仕方である「他地域との結び付き」を意識した記述がどの程度表現できているかとする。「他地域との結び付き」を意識できていると推定される用語・具体例を第6表のように8種設定し、その用語・具体例の記述数の増減を比較した。

第6表 「他地域との結び付き」の記述例

- 1 首都（例 首都・東京は～）
- 2 日本の中心（例 東京は政治の中心地として～）
- 3 東京大都市圏
- 4 交通網（例 東京国際空港、成田空港、など）
- 5 過密
- 6 流行・情報の発信地としての都市
- 7 ～との結び付き・関連・関係の記述
- 8 その他（例 他地域から人口が集まり～等）

イ 変容の分析

結果は第7表のようになった（○は「増加」、▲は「増減なし」、×は「減少」を表す。「他地域との結び付き」を意識した記述の「増加」「増減なし」「減少」のすべてにおいて差が確認された。「増加」についてはA組の方が約40%高く、「変化なし」「減少」についてはA組の方が約20%ずつ低い数値となった。特にA組の「減少」は一人もいなかった。

第7表 「他地域との結び付き」を意識した記述

	「他地域との結び付き」を意識した記述		
A組	○：87%	▲：13%	×：0%
B組	○：48%	▲：33%	×：19%

ウ 変容の差に関する考察

このような違いが見られた要因として授業の工夫3の教師の積極的関与の度合いの差が挙げられる。教師の積極的関与の5・6を実施したことが、より「他地域との結び付き」に沿った特色をとらえることにつながったと考えられる。

(2) 「知識・技能」の変容

ア 変容の見取り方

「知識・技能」の変容は「事前アンケート」とワークシートの「関東地方の特色に関する説明文」を比較・分析して見取る。記述を見取るポイントは説明文中の「基礎的な知識」（第8表）に関する記述がどの程度表現できているかとする。「基礎的な知識」は国立教育政策研究所「特定の課題に関する調査」（平成19年1・2月実施）にある「社会科における基礎・基本となる知識や概念に関する調査」を参考に設定した。

第8表 本研究における「基礎的な知識」

- 1 地名・固有名詞
- 2 教科書の重要語句（単元の太字用語15個）
- 3 事実関係（「～に～がある」など）

イ 変容の分析

結果は第9表のとおりである（○は「増加」、▲は「増減なし」、×は「減少」を表す。「3事実関係」の記述はA組B組ともに望ましい変容である「増加」の割合が90%を超えた。記述の「増加」は生徒たちが学習内容を理解し、知識を習得したことや、知識を活用して自分なりに考えたことなどを記入できるようになったことが要因と考えられる。

第9表 「基礎的な知識」の増減

	1 地名・固有名詞	2 重要語句	3 事実関係
A組	○：66% ▲：17% ×：17%	○：57% ▲：39% ×：4%	○：91% ▲：9% ×：0%
B組	○：81% ▲：15% ×：4%	○：44% ▲：37% ×：19%	○：93% ▲：7% ×：0%

しかし「1地名・固有名詞」「2重要語句」の「減少」部分で対照的な結果になった。「1地名・固有名詞」ではA組の「減少」数はB組の4倍、逆に「2重要語句」の記述数ではB組の「減少」数がA組の5倍に達した。

ウ 変容の差に関する考察

このような変容の差が見られた要因も教師の積極的関与の度合いの差にあると推測する。「他地域との結び付き」を意識した記述には「2重要語句」が多く含まれる。よってA組では「他地域との結び付き」を意識した記述が増加したことで「1地名・固有名詞」の記述が減少し、B組ではその逆の傾向が見られたと考えられる。

(3) 「学習意欲」の変容

ア 変容の見取り方

「学習意欲」の変容は単元第7時に使用したワークシートの「授業の感想」の記述から分析する。記述を

見取るポイントは二つ設定した（第10表）。

おわりに

第10表 「学習意欲」を見取るポイント

知識が増えたこと・気付いたことへの言及

例：～が分かった ～学べた ～がおもしろいと思った

意欲的な記述・さらなる向上への言及

例：はじめは～だったけど～だった もっと～を調べたい

本研究では10名の生徒の記述を取り上げる。「事前アンケート」の学習意欲（第11表）について集計値が高かった群と低かった群からそれぞれ5名ずつ選んだ。

第11表 事前アンケートの「学習意欲」の項目

- 1 社会科の勉強が好きですか。
- 2 教科書や地図帳にある写真や地形図を見て、調べたい事柄や疑問を見つけるのが好きですか。
- 3 様々なグラフや図表を読み取る学習は好きですか。
- 4 ペアやグループで学習する活動がある授業は好きですか。
- 5 自分の考えや調べたことを文章にまとめたり、説明文を書くなどの活動は好きですか。

高い群と低い群を分けて取り上げたのは授業の工夫が学習意欲の高低に関わらず、すべての生徒にとって有効であるかを分析するためである。「学習意欲」集計値が低かった生徒（第12表）と「学習意欲」集計値が高かった生徒（第13表）の記述は次のとおりである。

第12表 「学習意欲」集計値が低かった生徒の記述

- 生徒A 今日は関東地方についてさらに深く知れたと思う。ひさびさにおもしろかったです。
- 生徒B 関東地方は、いろいろな特色があることがわかりました。首都の東京には有名な場所がたくさんあることもわかりました。
- 生徒C 関東地方についてよく学ぶことができました。
- 生徒D 色々な観光地などがある。建物とか多いと思う。関東地方で色々楽しめる。
- 生徒E 前回に続けて関東地方のことを良く知れた。

第13表 「学習意欲」集計値が高かった生徒の記述

- 生徒F 自分が思っていたより、観光地がいっぱいあった。草津温泉はどこにあるか調べる。
- 生徒G 関東地方は今まで自分が知らなかったことがまだまだあるので、これからどんどん知っていこうと思います。関東地方は意外とすばらしいところだとわかりました。
- 生徒H 改めて自分の住んでいる関東地方のことを知った。だけど、まだ知らない関東地方の良いところ、抱えた問題もあると思うので、それらを見つけて知っていきたい。
- 生徒I 関東地方は楽しめる場所がたくさんだと思っていたが、工業が盛んだったり自然が多かったりと色々なものがあるんだなと思いました。14年も関東地方に住んでいるのに、知らないことが意外とあるんだと思って、もっと関東地方について知りたいなと思いました。プランは昨日つくったものと結構ちがうものができました。
- 生徒J 今回の授業で関東地方の特色についてまとめることができました。関東地方にはバランスよく楽しめる場所があるとわかりました。

イ 変容の分析・考察

第12表の記述には、知識が増えたこと・気付いたことへの言及などが見られた。他方、第13表の記述には意欲的な記述・さらなる向上への言及が見られ、記述量も多い。その他の生徒の記述を分析しても学習意欲の低下がうかがえるものはなかった。

これらのことから「観光」の視点を取り入れた学習や授業の工夫が、学習意欲の高い生徒だけでなくすべての生徒の「学習意欲の向上」にとって有効だったと考えられる。

本研究の目的は「動態地誌的な学習」の明確な解釈と、それに基づく具体的な単元・授業を「授業の工夫」を組み込んで設計することであった。また、授業の実践と生徒の変容の分析をととして「授業の工夫」の有効性を検証することであった。

前者については、静態地誌的な学習や「総合学習」との違いを意識し、設定した「授業設計の視点」に基づいた単元・授業を提示できた。また、学習展開「2次」の学習内容を「3次」で「地域的特色をとらえる」ものに再構成する「装置」としての「観光プラン学習」や「装置のスタートボタン」としての「教師の積極的関与」などの「授業の工夫」を組み込むことができた。後者については「他地域との結び付き」に沿った記述の増加や学習意欲の向上など生徒の変容が見られた。今後は、他の地方についても、「課題」を克服する学習プランを開発していきたい。

「動態地誌的な学習」による単元・授業は書籍や出版物などで数多く提示されるようになった。しかし、「授業実践に基づく研究」の蓄積が進んでいない。本研究を開始した時点（平成24年4月）で入手できたのは塩満のものが唯一であった。今後は、各地方の「授業実践に基づく研究」とその成果が広く発信されることが望まれる。

引用文献

- 文部科学省 2008 「中学校学習指導要領」東山書房 p. 35
- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版 p. 49
- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」
- 朝倉啓爾・伊藤純郎・橋本康弘 2008 『中学社会をよりよく理解する』日本文教出版 p. 19
- 塩満貞徳 2010 「動態的地誌学習による授業設計—中学校社会科地理的分野『日本の諸地域』を例にして—」
- 山口幸男編 2011 「動態地誌的方法によるニュー中学地理授業の展開」明治図書 pp. 15-16

参考文献

- 国立教育政策研究所 2007 「特定の課題に関する調査」(http://www.nier.go.jp/kaiatsu/tokutei_shakai/06002020000007001.pdf (2012. 6. 20 取得))
- 日本政府観光局 2011 『JNTO 訪日外客訪問地調査 2010』結果概要 (http://www.jnto.go.jp/jpn/downloads/110126_houmonchi2010_attach.pdf (2012. 5. 31 取得))